

平成27年度 事務事業マネジメントシート

事業名	つばさ学園運営事業			会計	款	項目	大事	小事
				01	03	02	07	02 01
政策	01	1節 整備・開発と自然環境のバランスがとれた流山（都市基盤の整備）		主管課	児童発達支援センター			
施策	4-2	高齢者や障害者がいきいき暮らせる社会づくり		主管課長	長谷川 聖二			

I 事務事業の目的・内容

事業目的	対象	概ね2歳から18歳未満で、成長や発達に心配がある児童及びその保護者。 (通園児は3歳から6歳児)	意図	子どもの障害及び程度を保護者が受容し、必要な療育支援を受けることによって幼児・児童の運動、ことば、社会性など、全体発達を促す。
事業内容	月曜日から金曜日まで通園バスを利用して登園し、集団活動を行う。また、基本的な生活動作、情緒や運動機能を育て、幼児・児童の社会的自立と地域での生活に向けて支援する。			
事業開始から現在までの状況変化	昭和52年マサースホームから知的障害児通園施設つばさ学園となる。平成24年4月から経過的処置として「児童発達支援センター（福祉型）」となる。平成27年4月からは、児童福祉法に則った「流山市児童発達支援センター」となり、現在は心身の発達に遅れや心配のある幼児・児童の療育支援や理学療法などを行っている。また、医療的ケアが必要な重複障害児の受け入れも行っている。			

II 事務事業の実績・現状及び成果を表す指標の動きとコストの状況

指標	名称	平成25年度	平成26年度	平成27年度	単位	目標方向	算定式（成果指標の場合）
指標	① 延べ利用人数	5,411	5,664	6,046	人	→→	
	②						
	③						
	④						
指標で表すことができない定性的な成果	目的に対する現状（客観的事実・データに基づく現在の状況や取組状況）						
事務事業のコスト	平成25年度	平成26年度	平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> 平成27年度の通園児童数は年度当初32名で途中園児の増減があったものの年度末で32名で概ね定員（30名）を維持した。 医療的ケア（喀痰吸引）が必要な重複障害児においては、前年からの継続児を含め2名に対応した。 平成27年度はセンター化に伴い施設充実を図るため増改築工事の設計に取り組んだ。 			
事務事業の総コスト(a=b+c)	138,124,538	131,839,370	140,130,812				
事業費(b)(円)	34,374,138	31,220,370	31,052,812				
うち一般財源							
職員給与費(c)(円)	103,750,400	100,619,000	109,078,000				
人役・職員(人)	13.00	13.00	13.00				
人役・再任用(人)	1.00	1.00					
人役・臨職(人)	6.40	5.00	7.00				
人役・嘱託(人)							
初期投資コスト(円)（建設又は取得年度のみ記入）							
想定耐用年数（年）（建設又は取得年度のみ記入）							

III 事務事業の評価、今後の方向性及び業務改善 <※主管課長記入>

(1) 事務事業についての評価及び今後の方向性

個別評価	必要性	今後の必要性	A 必要性が高まると考えられる	有効性	目標達成度	A 達成できた
		市関与の必要性	A 市が担うべき	効率性	対象者の適切性	A 対象者は適切である
					コストの削減	A 削減の余地はない
総合評価	II 継続（事業を現状どおり継続すべき）					

(2) 事務事業の業務改善について

①今年度(H27)の改善計画	児童発達支援センターとしての機能充実の取り組みとして、施設の増築・改修工事の設計をする。	③取組の課題	<ul style="list-style-type: none"> 障害児を抱えた保護者の負担軽減。 改修工事期間中の児童、福祉会館利用者への安全配慮。
②今年度(H27)に実施した取組	利用児の増加・重度化に伴い支援内容や職員体制等、近隣市や今後の市における人口の推移等を調査し具体的な取り組みを行った。センターとしての機能を高めた施設の設計を行った。	④今後の改善計画	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の来園回数を減らし負担を軽減する。 工事区域をフェンスで区切り、警備員を配置し安全の確保をする。